

が主体となつています。これまで霞ヶ浦汚濁の背景を探つてきましたが、詰まるところは国民経済の成長とそれに伴う都市的環境の膨張によつてもたらされたものであり、高度成長政策の縮図ともみることが出来ます。この総合開発事業もまた成長政策の一翼を荷なうものであるから深い反省が必要と思われず。

一方、霞ヶ浦は四七年環境庁より「十年以内に湖沼A類型に、暫定目標として五年以内にB類型に」と告示されました。このため、工場排水、畜産排水などの排水基準の強化、流域下水道事業の推進、終末処理場における高度処理、湖底底質泥土の浚渫など実施目標があげられています。はたして霞ヶ浦の水質保全についての確立された決定的なプランがあるのでしょうか。この確固たるプランを地域住民の前に示すことなくして、開発事業を先行させることは誠に危険であるといわなければならぬであらう。

(茨城大学 農学部教授)

水を資源として守ろう

本 郷 良 和

水、この透明な無味無臭の液体は、ローマ帝国の昔より二十世紀の今日まで、人間には無くてはならないものであった。しかしながら、今なお人間は、水を完全にコントロール出来ないでいる。例えば、日本がよい例である。日本はよく水が豊富だと言われている。はたしてそうだろうか。日本の平均降雨量は、年間千六百ミリで、地球全体の平均七百五十ミリよりはるかに多いがその大部分は、梅雨期と台風期に集中している。そしてその大半は有効に使用されずに海に流れてしまうのである。また、その時期には多くの水害が発生することになる。そして冬、あるいは最も必要を夏には水不足に陥るのである。こう考えれば、日本は降雨量は豊富だが、実際にはそれらを有効に使用しているとは言えない。

では、梅雨期あるいは台風による豪雨をダムによってせきとめたらよいと思いが、それも一概には言えない。なぜなら数日の間に何億トンもの突然の降雨を包容でき